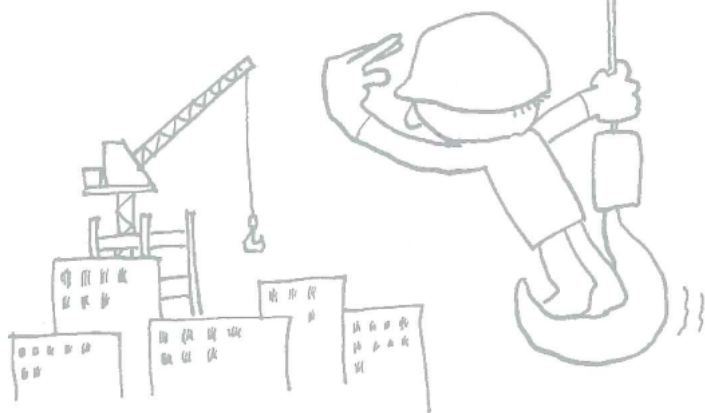


学校では
教えて
くれない

施工 現場語 読本

秋山文生 著



彰国社

施工

学校では
教えて
くれない

現場語

読本

秋山文生 著

はじめに

エー人というものは、自分たちの世界でえか、仲間うちでしか通じない言葉を使いたがるもんですな。博打好きの間では運が逃げるのを嫌って猿のことを「エテ公」だとか、するめを「アタリメ」、梨を「有りの実」だとか……。本書は古今東西、建築現場で使われている言葉、用語、名称、慣用語、つぶやき、ため息、青息吐息を集め、なぜそう言うのか？ なぜそう言うようになったのか？ を探ってみよう、たどってみようという前人未踏、広大無辺な探索です。

現場にいた時分、打合せなどで職人さんと話をしているときにその種の言葉が出てくると話の腰を折り「いったい、なぜそういう言葉を使うのか？ その由来は何か？」と問いただし、「昔っからそう言うからなァ。知らねえな」という具合の迷惑至極の現場マンでした。さて言葉のストックも溜まり調査に取り掛かりましたが、語源辞典には建築用語はあまり載っていません。また、建築用語辞典には語源の解説があまり載っていない。ネットで検索すると建築用語を扱ったサイトが数々ありますが、言葉の解説が主であり語源の解説は詳しくない。辞書や辞典、建築施工関連の資料などを手当たり次第に調べたり、関連する業者や担当者に聞いたりしました。そのなかから現場デビューした若手技術者が耳にする現場語で「へー」と思わせる語源を持つものを選び、現場で見聞きしたエピソードを加えて90編にまとめました。

忙しい建築現場では「そんな語源よりも、まずは内容の理解が優先だろ」となりがちです。でも、用語の語源でさえ探ると興味深いトリビアが出てくる。さらにその内容を調べれば、現場のものづくりの知恵やプライド、矜持が見えてくるはずです。さあ仕事の繁忙に負けないよう、建築施工に好奇心を持ってものづくりを楽しみましょう。

2017年5月

秋山文生

目次

はじめに … 3

道具

- file 1 猫車 … 8
- file 2 墨つぼ (1) … 10
- file 3 墨つぼ (2) … 12
- file 4 のこぎり … 14
- file 5 くぎ … 16
- file 6 くぎ抜き … 18
- file 7 かなづち … 20
- file 8 げんのう … 22
- file 9 かけや … 24
- file 10 スコップ、シャベル … 26
- file 11 番線 … 28
- file 12 滑車 … 30
- file 13 トラ … 32

仮設

- file 1 箱番 … 34
- file 2 万能鋼板 … 36
- file 3 ビテイ足場、アンチ … 38
- file 4 朝顔 … 40
- file 5 端太角 … 42
- file 6 じょうご … 44

職人

- file 1 鳶 … 46
- file 2 大工 … 48
- file 3 棟梁 … 50
- file 4 左官 … 52
- file 5 土工 … 54
- file 6 土間工 … 56
- file 7 鍛冶 … 58
- file 8 斫り … 60
- file 9 万棒取り … 62

服装

- file 1 地下足袋 … 64

- file 2 軍手、軍足 … 66
- file 3 ニッカボッカ … 68
- file 4 ヘルメット … 70

杭

- file 1 杭 … 72
- file 2 コンプレッソル、ペDESTAL … 74
- file 3 深礎、ベノト … 76
- file 4 アースドリル、リバーズ … 78
- file 5 構真柱 (1) … 80
- file 6 構真柱 (2) … 82
- file 7 トレミー管 … 84
- file 8 もんげん … 86

揚重機

- file 1 クレーン … 88
- file 2 ジンボール、デリック … 90
- file 3 ガイデリック、ゴライアス … 92
- file 4 クローラ、レッカー … 94
- file 5 ラフター、オルテレン … 96
- file 6 ユニック … 98
- file 7 玉掛け、台付け … 100
- file 8 もっこ … 102
- file 9 ゴーヘイ、レッコ … 104
- file 10 スラー … 106

掘削

- file 1 根切、山留 … 108
- file 2 矢板、シートパイル … 110
- file 3 腹起し、切梁、火打ち … 112
- file 4 きりんジャッキ … 114
- file 5 ねこアングル … 116
- file 6 釜場 … 118
- file 7 油圧ショベル … 120
- file 8 トラクタショベル … 122
- file 9 ブルドーザ … 124
- file 10 土、泥、砂、礫 … 126
- file 11 砂利 … 128
- file 12 シルト … 130

コンクリート

- file 1 コンクリート … 132
- file 2 混凝土、ベトン … 134
- file 3 ラップル、シンダー、捨てコン … 136
- file 4 セメント … 138
- file 5 モルタル … 140
- file 6 打設 … 142
- file 7 ホッパー … 144
- file 8 ジャンカ … 146
- file 9 アバタ … 148
- file 10 ひび … 150
- file 11 本実 … 152
- file 12 ヒューム管 … 154

仕上げ

- file 1 石 … 156
- file 2 花崗岩 … 158
- file 3 みかげ石 … 160
- file 4 大理石 … 162
- file 5 びしゃん … 164
- file 6 けれん … 166
- file 7 トミジ管 … 168


状態

- file 1 おしゃか … 170
- file 2 だめ … 172
- file 3 すかたん … 174
- file 4 おじゃん … 176
- file 5 てれこ … 178
- file 6 ばち … 180
- file 7 あっばっばあ … 182
- file 8 えんこ … 184
- file 9 けつわり … 186

おわりに … 188

参考図書および文献 … 189

施工現場語 読本



file 1 猫車

むかしむかし、ねずみの娘さんが嫁ぎ先から実家に戻って来た。母「チョイトどーしたのよ、お向こうのお姑さんは良さそうな人だったじゃないの。お前の我慢が足りないんじゃないのかい」娘「お母さん、そうじゃあないの。やさし過ぎるのよ、私を呼ぶのにネコ撫なで声……」

現場が始まり、まず現地に準備に行きました。「ネコがあったほうがいいな」と土工の職長のぼうまごさ胴間声。新入社員がまずとまどう言葉がネコです。今や猫車は一輪タイプでモルタルや仮設小物の運搬が主な役目ですが、もとはコンクリートや土砂の運搬道具。コンクリートポンプ車が1960年ごろ登場してその役を譲るまでは、二輪タイプでコンクリ運搬の主役です。定礎式や上棟式には金のじょれん、金の罫を用意し、紅白の幕からコンクリを入れた金の猫車が登場（それはない）。

「広辞苑」で「猫」は「土・砂を運ぶ一輪車。長い柄をつけて押す。数え方は1台。猫車の別称」、「大言海」では「荷物ヲ運搬スルニ用キル柄棒アル一輪車」と肝心の語源の解説はありません。調べると語源は諸説あり、コンクリ打ちのときに手押し車を通すために架ける幅の狭い仮設通路足場が猫足場ねこあしばたでそこを通るから、動かすと車輪がゴロゴロと音を立てノドを鳴らす猫のようだから、立てて置いた姿が猫に似ている、逆さに伏せると猫の丸まった背中に見える、コンクリなどコネたものを乗せるからその反対読み、練ったもの、練子、練り粉の短縮、忙しくて猫の手も借りたいときに必要だから、『三国志演義』の蜀漢の軍師、諸葛亮孔明が兵糧運搬用に開発した機械仕掛け手押し車木牛流馬の派生、等々きりが無い。語源や由来はよくよくわからないということになっている用語です。

さらに調べると、ドイツでは猫車をKipp-Japanerと呼ぶらしいことを発見しました。調べると販売するドイツのメーカーのサイト

には、笑顔の我が同胞が猫車を押している写真が貼り付けてある。直訳すると傾いた日本人！ なぜこれが手押し車の名称になっているのだ？ と調べましたが解答は見つかりませんでした。猫車は積載した土砂などを降ろすときには、車輪を停止して手押し棒を上↑に担ぎ上げて荷台の桶をダンプカーのごとく傾けます。最後まで降ろし切るには、桶を数回さらに倒し込みます。お辞儀の習慣がないドイツ人は、この動作から体を折り曲げて深くお辞儀をする日本人を連想するのでしょうか。日本人（のお辞儀）のように、傾けて使う手押し車はKipp-Japanerという名前がドイツでは定着しているのだと考えました。

猫車の語源で、私が確信しているのはキャット説です。英語で一輪車はwheelbarrowで二輪車はcart[ká:t]、猫はcat[ká:t]。このá:とæの発音は日本語にはない音だから区別しにくい。cartがcat[ká:t]と聞こえるので、「されば、我らはこれを猫車と称さん」。

皇居お堀端の第一生命館の建設記録フィルムを見る機会がありました。1935(昭和10)年の映像に、いろいろなしるしぼんてん印半纏を着たイキな職人さんたちと、襟付きチョッキの三つ揃いの背広を着てソフト帽をかぶっているシャレた人びとが写っていました。「オレは世の中の最先端技術だぞ」という自負が画面にみなぎっていて、カートをネコと江戸前で洒落る先輩たちの横顔を覗いたような気がしました。



file 9 万棒取り

先輩がふと「万棒取りはなぜそう言うか知ってるか」と宴会の席で話題に取り上げました。万棒取りというのは、根切り時、残土を搬出するダンプの台数を数えながら竹ぼうきで鉄板の上を掃いている人をそう呼びます。コンクリート打ちの日、「どんどん出してくれないとカントクさんに怒られちゃうんだよなあ」と生コン工場で電話しながら、生コン車のナンバーをチェックしている人です。「建築大辞典」では数を数える人のこと、現場に搬入される材料の点検、車両の数などを数えること、とあります。

先輩の話はこうでした。昔は車1台につき竹ひご1本として勘定していて、その竹ひご bamboo [bæmbú:] が訛ってマンボ→まんぼうになったんだという（確かに棒に竹ひごの名残をとどめています）。

1950年代に流行したペレス・ブラード楽団の「マンボNo.5」に代表される、東京キューバンボーイズ、美空ひばりの「お祭りマンボ」といった一連のマンボムーブメントの流行と一緒にマンボ取りという名称が浸透していったのか？ 当時現場では、流行のマンボズボンをはいたイカしたキューバンラテン野郎が、竹ぼうきを持ってマンボステップを踏んでいたかもしれません（そんな奴いるわけねーだろと思いつつ、髪をドレッドヘアや、ポニーテールにしてドカンズボンの半切りをはき、鼻にピアスしているおしゃれ？な連中も現場で見えるようになったけど、あれがイカした奴かなあ）。

コンクリート打設の日には生コン商社から生コンの出荷を管理する係が出張してきて、生コン車の車伴と出荷から到着、荷卸りしまでの時刻を克明にチェックシートに記入して、出荷速度を調整していました。デリバリと自称していましたが、マンボ取りとも呼ばれていました。このマンボウの由来について、数年後にもベテランの警備員さんからも同じ話を聞いたので、あながちあてずっぽうでも

ないと思いつつ……。

「大言海」を調べるとマンボウ（萬棒）は「竹ノ馬來語、Bambuノ訛、新嘉坡邊ヨリ傳ワルト。竹ノ棒ノ數取」とありました。「船舶用語辞典」には、海運関連の用語として「マンボ取り（員数を数える）の語源はbamboo（竹）」と記述されています。かつてはしけ船による荷運搬の検収で竹の棒を使っていて、竹棒勘定法（bamboo tally）の竹のバンブーと、勘定法のタリーが海運荷役の現場用語語としてマンボ取りになったようです。さらに調べると、この竹製のマンボウが博物館にあることがわかりました。1998年に開館した東京港区高輪にある流通博物館、主に日本通運（株）の所有していた文書、実物、写真、映像を収蔵しており、江戸時代から昭和までの物流のあゆみやしくみを紹介しています。「明治時代以降の流通展—荷役のあゆみ」のコーナーに、竹べら状の棒数十本とこれを立てる木製スタンドが展示されています。解説は「荷役作業の際、荷物をいくつ運んだか数えるための道具です。荷物を担いだときに1本手渡してもらい、荷物を倉庫などに運び入れる時点で返します」とあります。

竹の棒で員数を数える方法がシンガポールから海運の運搬、さらに陸上の荷役で使われるようになって竹の棒が万棒になり、これを使った員数勘定（バンブータリー）が万棒取りになったと思われる。



file 3 ニッカボッカ

深夜TVの演歌特選で、かつて女心を切々と歌っていた歌手が「男の涙」という曲を歌っていました。緑の丸首長袖シャツ、多機能ポケット付き空色のチョッキ、股から膝まで広がり膝下で裾が締まる同色の横広ズボン、足元は地下足袋と現場ではおなじみの姿。ラム入りモール縁飾りの派手なジャケット姿を見慣れているから、スタジオセットの中では違和感が少々。これは、コントやコメディの現場作業員姿のステレオタイプじゃないか。でも最近では技能職の求人雑誌の表紙として電車の吊り広告で見掛けるし、曲がヒットすればステータス向上になるか。

「羽のように横に広がっているズボン、あの形には理由があるの?」。裾が締まるズボンほかにありますが、確かに横広がり形状は現場作業着独特です。「近代装飾事典」によれば、ニッカーボッカーズまたはニッカーズはゆったりした膝下丈の裾口をしばった半ズボン。同類のものがbreechesとして17世紀からあり、自転車の普及とともに広がり乗馬・狩猟・ゴルフ・スキー・海水浴と、カジュアルウェアとして定着します。今でも伝統派のゴルファーや登山家に愛用され、婦人服としてもリバイバルしています。ニッカーズの語源ははっきりしています。1809年、アメリカ文学の父ワシントン・アーヴィングが、パロディ短編小説『ニューヨークの歴史』をペンネーム、ディートリヒ・ニッカーボッカーで出版しヒット。ニューヨークがまだニューアムステルダムと称したころのオランダ移民のことを取り上げていて、オランダ人の挿し絵が半ズボン姿だったことからこのズボンをKnickersと呼ぶようになり、以後オランダ移民やその子孫New YorkerまでもKnickerbockersと呼ぶようになったとのこと。一方イギリスでは生地がフランネルの婦人用下着となり、これもKnickersと呼ぶらしい。記憶をたどると、女子の体操着が綿製の提灯ブルマーから伸縮性のあるパンツタ

イブに替わり、それをニッカと呼んでいました。ブルマーの語源は、1840年ごろハーレムパンツ風のズボンを女性解放運動家アメリカ・ブルマーが広めたことから。

寅壺、関東鳶といった鳶衣料メーカーによると、横広ズボンは七分→八分→ロングと長さ・幅が増し、最近の若い鳶さんにはカラフルな超ロングがはやり。バリエーションでは胸下まで立ち上がりのある胴付きや、膝下の締まった部分が長いものもあるとか。鉄骨建方作業など足場の悪い高い所で、下半身が安定する、猫のヒゲ同様たるみで幅を計れる、などといわれますが、重さがないから重心が下がるわけではなく、身体の一部じゃないんだから、これは眉ツバ。

初めは、例えば乗馬用の軍服を作業着として使ったところ、裾がじゃまにならず動きやすく丈夫で具合がいい。さらにゆったりさせ裾を地下足袋となじむようにさせた結果、現在のような形に改良されていったのだと思います。あとは、女子高生の白ソックス、男子学生のズリパン同様、だんだんルーズになりかっこよさを極めます。

ここでズボンの語源を2説紹介。一つは幕末に洋装として入ってきた洋袴、足がズボンまたはズボンと入るから。もう一つは、伝説の女性のペティコートを意味するjuponの転訛という説ですが、明確ではないようです。



file 9 ゴーヘイ、レッコ

現場ではクレーンの合図は、25tのラフターでも1,500t・mのタワークレーンでも無線で行われます。合図する鳶さんはヘルメットのつばに付けたマイクに向かって「ちょい右旋回。はいストゥッ。オヤスラー、コーゴーヘイ。ゴーヘイ、ちょいコースラー」「レッコスラー、スラー、ストゥ」。独特の節を付けて歌うようにつぶやく人、チョイチョイと指先でも合図する人、腕を振り回す合図と大声を併用する人、といろいろです。(一社)日本クレーン協会で提案されている合図は、手旗・手動作によるもの、笛のモールス信号調のものに限られています。しかし、現場では専門用語が日常使用されます。

「**ゴ**ー**ヘ**イはブームを起こす、ワイヤを巻き上げる、と「上げる」意味で使われます。国語辞典には出ていません。比較的現場用語が多い二、三の建築用語辞典に記載されていました。「建築大辞典」には「鳶職用語。ウィンチの巻きを指示するとき、仕事開始、吊上げ開始を指示するときを使う」とありました。一般的にはgo ahead(前進する)が、ゴアヘッ→ゴヘ→ゴヘイと日本語化したものとされています。英和辞典ではgo aheadは、①前方に進む、②(相手をうながして)どうぞ、お先に、③(船が)前進!とあり、③は海運用語だそうです。

ところで、日本へのクレーン輸入第1号は、1891(明治41)年に横須賀海軍工廠の造船所に設置されたとされています。後の1907(明治40)年に建築用木製デリックが登場しても、海運荷役用の埠頭クレーンが主流だったでしょう。となると、合図者は船舶乗組員。go ahead(前進)が積荷を前に進める、陸に積荷を揚げる、から「ワイヤやブームを上げる」ことを意味する言葉になり定着したことも考えられます。go aheadの反対の海運用語go astern(後進)を、**ゴ**ー**ヘ**イの反対語(**ゴ**ース**タ**ン)として記載している建築用語

辞典もありました(ゴースタンは聞いたことがない)。無線や有線もなく、声だけの合図が不安全ということで手や笛の合図を定め、のちに無線が高性能になって声だけの合図に戻って、埠頭クレーンの合図用語が復活したのでしょうか。

レッコは荷を降ろし終わりフックを外すために、ワイヤをどんどん巻き出すときなどに使います。「建築大辞典」では「でっこ：ウィンチなどを使った吊上げ作業中に、ワイヤを緩めるときに運転手に合図する鳶職用語。ものを吊上げ中にワイヤが切れて落下したときも使う」。Let's goが語源と聞いたことがあります。Let us go(さあ、行きましょう)では、どうもクレーンと関連がない。改めて英和辞典を見ると、let goのほうがぴったりします。意味は①……を解放する、自由にする、②(握っているもの)を手放す。ワイヤをどんどん巻き出すには、ワイヤドラムのストッパーを解放して自重で落ちるのにまかせます。日本語化はレグゴ→レッコでしょうか。

作り話を一つ。ベテランの鳶だったご隠居に、ゴーヘイの由来を聞きました。「ゴーヘイじゃなくて、本当はコウヘイなんだナ。甲乙丙の乙がない、乙ない、落ちないで上げる。落ちるは鳶の忌み言葉だな」「じゃスラーは?」「ワイヤをスイスイ降ろすだろう。スイスイスラスラ、スイスイスラーとな」「じゃあレッコは?」……小指を立てて「コレコレ」?



file 1 おしゃか

エーお釈迦様は、御誕生されるまでずいぶん長い間お腹の中にいらしたてえいいます。ある年の4月8日、だしぬけに生まれますとちょちょこと7歩進んで天と地を指差して「天上天下唯我独尊」とおしゃった。生まれたての子供が「この宇宙で尊いものは自分だけだ」てんで、周りの大人は「生意気な小僧だ」とばかり甘茶をぶっかけておとなしくさせようとする奴はいるわ、ポカポカッとやった手の早い乱暴者もいたそうで。これから、4月8日の誕生日を祝う花祭りには、その像に甘茶を注いで拝むようになったそうです。だから、お釈迦様の頭は今でもコブだらけになっているそうで。なるほど、ぶつぞー……と、落語のマクラにあります。

「トラックが荷崩れして、運送中のサッシがおしゃかに」「ユニックのブームを起こし過ぎて、軒天井を壊しておしゃかだ」「本設の蛍光灯を仮設電気で点けたら、電圧が低くてすべておしゃかだよ」。予想に反して不良品になってしまったときに、おしゃかになると使います。

「日本国語大辞典」には①釈迦誕生の日に行う花祭り、②勝負などに負けて無一物になること、③頭からずぶ濡れになること、最後に④製品をつくり損なうこと、とあります。この用法は工場労働者のスラングだったものが、戦争中の学徒動員で工場へ手伝いに行った学生を経て世間一般に広がったとされています。なぜ不良品や不合格品をこう呼ぶかは、二つの語源説があります。

一つは鋳物工場から。お地藏様の注文を受け鋳造したところ、馴れない仕事だったためお釈迦様に似てしまった。以後、造り損ないをおしゃかというようになった、という説です。もう一つは東京下町の鉄工場から。半田を使って熔接する場合、火力が強過ぎると半田が流れてしまい接着がうまくいかない。熔接の失敗原因は「火が強かった」。東京下町ではこれが、シガツヨかった→シガツヨーかだ。

これからこの日をお釈迦様の誕生日と洒落て、失敗をおしゃかと言ひ替えた、という説です。楳垣実著『語源随筆・猫も杓子も』（創拓社刊、1989年）に、「念の入った洒落なので江戸時代に生まれたものと考えたい」と紹介されており、地藏の鋳物説は全くの作り話としています。接着の失敗が製品の失敗の意味まで拡大したのは、「お釈迦様でも気が付くめえ」のセリフを引用しています。

ダメになるの意味で「お陀仏になる」とも言います。「南無阿弥陀仏」とお念仏を唱え人が死ぬことを意味し、物がダメになることもお陀仏。無一文になる、ダメになるような惨め（お陀仏、おしゃか状態）なときは、仏にすがりたい気持ちの表れでしょうか。

弟子がお釈迦様に聞きました。「先生、胎内に長くおいでなすつたと伺いますが、やはり帝王切開でご出産されたのでしょうか」「我は釈迦国の皇子として生まれしゆえ、皇帝にあらず。カエサル・シーザーは後の時代の生まれなり」……オチの解説になります。が、帝王切開Caesarean sectionの語源は①手術の切る鋏scissorsが皇帝であるシーザーと誤読されたから、②皇帝シーザー出生の伝説から、③分家である名前シーザーが本家から切り取られるに通じるから、そのほか諸説あります。①が通説ですが、誤った語源説とされています。

